

初等社会科における歴史学習をめぐる

野口 周一^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【抄録】

筆者は初等社会科における歴史学習のあり方に問題を感じて久しい。この度、当該問題について白井嘉一、波巖、竹内康浩、三氏の論考を読み込むことから着手した。特に竹内論文は専門の歴史研究の目指すところと学習指導要領という目標とは大きな隔りがあることを指摘したところに意義がある。

本稿は初等社会科における歴史学習のあり方について、まずは学習指導要領を徹底的に批判すること、次に初等社会科を履修する学生及び担当教員に「歴史とは何か」という命題にどのように向かわせるか、という問題点を提起したものである。

【キーワード】

初等社会科 歴史学習 学習指導要領

はじめに

筆者は兼任校において、小学校教員養成課程の「初等社会科教育法」を担当している。小学校社会、すなわち初等社会科においては「調べ学習・発表」や「グループ学習」が称揚されていることは自明の事実である。筆者もまたそれらに倣った授業を担当している。

然しながら、歴史授業については問題があると日ごろから考えていて、先には齋藤忠和氏の2編の論文を紹介したⁱ。氏は「歴史の授業には教員の歴史理解が必須であり、それなくしては歴史の授業は成立しない」、「歴史教員にまず求められるのは、手近な資料のみで済ませるのではなく、可能な限り歴史学研究成果を学ぼうとする姿勢で

あろう」と述べる。即ち、氏は「知」（歴史学研究成果）に立脚した授業作りを提唱したのであった。

本稿では、まず何が問題となるのか、その提示から始めていくことにする。

1、白井嘉一著「歴史学習の本質」を読む

標記論文は『社会科の本質がわかる授業 ③ 歴史』（日本標準、2008年）に収録されていて、それは、「1. 歴史学習のおもしろさ」、「2. 歴史学習という内容構成の意義」、「3. 歴史学習の内容構成の視点と観点」、「4. 6年：歴史学習のさまざまなパターン」、「5. 歴史学習と授業づくり」から成り立っている。

氏は、1において「歴史学習のおもしろさとは、何でしょうか」という問いから始め、「〈なぞとき〉の学習」を提唱する。ここでは「草戸千軒町遺跡」、「秩父事件と製糸工女」の二事例から、『遺跡』『お話』『紙芝居』や『史料の解説』によって、まさに歴史の〈なぞとき〉が進行します」とする。加えて「このような学習とともに、社会科の歴史学習においては、身近な地域の歴史をふまえて、その歴史が整理され、今まで学んできた『歴史』とつなげることも歴史学習における大切な部分として位置づけられています」として、「『父母から学ぶ、わたしたちの町の歴史』の単元を『戦後史』の歴史学習と位置づけるとともに、今まで学んできた『歴史』の学習と『現在』とをつなげる役割としても考えています」と述べる。

即ち、〈なぞとき〉による歴史学習の面白さについて述べるとともに、歴史学習を「現在」とつなげることにより、その意義を明らかにしていると考えられる。

2においては、氏は「なお小学校の歴史学習については、学習指導要領では中学校・高等学校の歴史学習と対比して『人物の働きや代表的な文化遺産を中心に』展開するように指示されていますが、たしかに小学校の歴史学習は中学校・高等学校の歴史学習と対比して、小学校段階に相応した興味関心に沿った、まさに楽しい歴史学習をとりわけ必要とします」、「ただし、資料・遺跡などにもとづいたお話や説明などによって、子どものなかに歴史的イメージを創り上げるという点に関しては、小・中・高校で共通していることについても注意する必要があります」と二点を強調する。

そして「ところで学習指導要領では、上記において述べたように小学校の歴史学習の特性を表す意図から典型的な『人物』を42名指定し、さらに『近代的な文化遺産』もいくつか明示していますが、このような指定は小学校歴史学習の本質か

ら見て必ずしも適切な方法とはいえません。ややもすると『英雄偏重』で『民衆軽視』といわれかねない措置ともいえるからです」という批判もきちんと書き込み、「ともあれ小学校歴史学習においては、子どもたちに興味関心を湧き出させるような、多様な人物や文化遺産を地域教材の発掘によって新しい教材をとともに創り出すような努力が必要でしょう」と述べるのである。

3においては、「6年の歴史学習の内容構成においては、原始・古代・中世・近世・近代・現代という歴史発展に沿う視点は必要であると考えますが、その際にその6つの時代の歴史発展の学習を、教師〈管理〉下の『一斉画一授業』によって行うこととは一線を画したいと思います」として、山本典人氏の「一斉授業を否定してはならない。……教師はもっと一斉授業に強くならなければならない。一斉授業のなかでこそみあい、ねりあげて子どもたちの認識を高めることができ、一斉授業と一斉画一授業は似て非なるものであることを知悉すべきである」（『子どもが育つ歴史学習』地歴社、2001年）という主張に賛同する。

そして、氏は6つの時代の歴史発展の学習を『一斉授業』として実現するうえで、四点の観点が必要であると述べる。即ち、「第1に6つの『時代』を『近代・現代』と『前近代（原始・古代・中世・近世）』に分けて大きくくりして『内容項目』（小単元）を精選すること」、「第2に子どもの『学習活動』を子ども主体の学習展開を進める立場から積極的に位置づけること」、「第3に庶民・民衆の歴史を重視し、人権発達という民主主義の歴史を積極的に位置づけること」、「第4に『日本』中心の歴史から脱却して、国際関係、特に東アジアとのかかわりを重視した歴史を積極的に位置づけること」、以上である。

4においては、①戦後初期の歴史学習では「世界における日本」というテーマのもとに、「通信

報道機関」「政治」「外国の関係」の三単現が設定されていたために、いわゆる日本歴史の系統的学習としては位置づけられていないこと、②1958年版以来、学習指導要領では「我が国の歴史」の学習が位置づけられたこと、1989年版では「『政治の中心地や世のなかのようすなどによっていくつかの時期に分けられることに』気づくこと、『人物の働きや代表的な文化遺産を中心に理解』することも明示され、さらに『42名の人物』も指定されたところに大きな特徴があります。これらの方針は基本的には今日まで引き継がれています」と述べられ、③では上記の学習パターンに対して民間社会科の研究団体の実践から四事例が紹介されている。

5においては、まず歴史学習はその内容に即して「問題解決学習」型授業や「系統学習」型授業がそれぞれ展開され、「『遺跡』『史料』にもとづいたお話」教材やクイズ・調べ学習・活動などを位置づけて、まさに楽しい授業を展開することが必要です」と強調されている。然る後に、「まさに楽しい授業を展開するうえで必要不可欠のこと」として三点が挙げられ、「子ども主体の学習を進めるうえで子どもの表現力を育成するため」に、戦後初期の学習指導法において重視されていた「構成活動」と「劇的活動」に学ぶ必要があることが提言されている。

如上、白井氏の掲げる問題点のなかから、今回は①「資料・遺跡などにもとづいたお話や説明などによって、子どものなかに歴史的イメージを創り上げるという点に関しては、小・中・高校で共通していることについても注意する必要があります」という点、②「『日本』中心の歴史から脱却して、国際関係、特に東アジアとのかかわりを重視した歴史を積極的に位置づけること」という点、③戦後初期の学習指導法において重視されていた「構成活動」と「劇的活動」に学ぶ必要があること、

以上3点について着目することにした。

2、波巖著「現代の社会科学習指導」を読む

波氏の標記論文は、『よりよい学習指導案からよりよい授業実践へ』（東洋館出版社、2010年）に収録されている。その「まえがき」の冒頭は、「これまで、鎌倉女子大学、東京学芸大学、国立音楽大学で多くの学生の学習指導案を読む機会に恵まれた。また、各地の研究会に招かれ、現場教師の学習指導案も数多く見せてもらってきた。年間ですと1,000件近くになる。その一枚一枚に目を通し、添削をし、機会があれば直接会って指導もしてきた。もちろん私自身も、新卒以来、数えきれないほど学習指導案を書いてきた。膨大な数の学習指導案を見ながら、数の威力を改めて実感している」という一文で始まり、著者の学習指導案に賭ける真摯な情熱を感得させる。

そのなかでも、ことに「『指導法』を書くには、そもそも社会科とは何か、そのねらいとするところや本質とは何かを理解されていなければならない。そのためには、まず学習指導要領を徹底的に読み込んでいなければならない。最新の改訂版はもとより、その大元となった初めての学習指導要領にも目を通したい。さらには、できるだけ先行実践例を収集・参照したい。多くの先人の知恵や技術からも学びたい」に着目させられる。

上記の点について、氏は「本書の構成」(5頁)において「第Ⅱ章では、社会科の変遷について触れる。そもそも社会科とはどんな教科なのか、教科のもつ特質・本質に触れていく。そのためには、どうしても初の社会科学習指導要領と初の社会科授業を見なければならない。平成20年度版までの学習指導要領は、幾多の変遷はあるにしろその改訂版だからである」と社会科の出発点に拘泥される。そして「次に、この初の社会科がどのよう

に変遷して現在に至っているのかについて見ていく。ここまで来て初めて、社会科教育における不易（変わらないもの）と流行（変わるもの）が見えてくるはずである。と同時に、これから社会科がどのように発展していったらよいかの展望も開けてくるかもしれない。「第三章では、最新の社会科学学習指導要領が、どのような構造になっているか、全体構造、各学年の構造を目標、内容の面から、叙述に即して具体的に見ていきたい。また、新しい学習指導要領のもと、社会科がどのように変わり、今後どのような点に気をつけていかなければならないかについても述べる」とするのである。

但し、氏の指導案作りに精魂を傾ける情熱には脱帽するものの、学習指導要領「改訂の時代背景とキャッチフレーズ」、「改訂の教育的背景とキャッチフレーズ」を一読すると、改訂の背景について氏の物わかりの良さが筆者には鼻につくのであるⁱⁱ。

また「現代の社会科学学習指導」において、氏は「教師の問題解決活動と子どもの問題解決活動は、異なるということである。したがって、教師が教材研究としての問題解決活動を行った後は、それはさて置き、今度は、子どもにどう見えているのか、子どもならどういふ問題解決活動をするのか、視点を子どもの側に移して問題解決活動をシミュレーションし直す必要がある。これが『教師の問題解決を、子どもの問題解決に180度転換する』ということである」と述べ、「この問題解決の転換こそが、最新の学習指導作成の最大のポイントである」と強調するのである(144頁)。この「最新」とは「『生きる力-絶対評価』時代の学習指導案」を指すのである(141頁)。

そして、第6学年「源頼朝の決断」の学習指導案を掲載するのである。これは、「1、単元 源頼朝と鎌倉幕府」、「2、研究主題について」<子

もの実態>、<子どもの問題解決への転換>、「3、単元の目標」、「4、単元の評価計画（観点別評価規準）」、「5、小単元の教材構造」、「6、学習計画（9時間）」、「7、本時の学習」、「8、授業の実際」と構成されている(144-152頁)。ここで、「(1)梶原景時がやってきたときの様子を再現する。<黒板には、しとどの岩穴の絵、関東武士団の地図が掲示してある>」という項目が立てられ、先生は「前の時間に、『わずか7人になってしまった頼朝たちは、これからどうしようと考えたのだろうか？自分が頼朝だったらどうする？』という問題ができましたね。今日は、この問題をロールプレイを通して考えてみましょう。意思決定表を確認してから、ロールプレイを始めましょう」と説明する(150頁)。その後、「梶原景時グループ」、「源頼朝グループ」、「関東武士団グループ」、「都の平氏と民衆グループ」のロールプレイが行われ、前二者のシナリオが紹介されているⁱⁱⁱ。

この授業案と展開事例について、筆者は受講学生にレポートを課した。ここで、そのレポートを紹介したいのであるが、分量が膨大となるため別稿を企図している。

3、歴史研究の目的と学習指導要領の関わり

竹内康浩氏に「小学校・社会科歴史における日本と世界の関わり」(『釧路論集』<北海道教育大釧路校研究紀要>第46号、2014年)という重要な論考がある。その重要性というのは標題にあげた「歴史研究の目的と学習指導要領」という節が立てられているからである。

氏は、冒頭「専門の歴史研究(歴史学)のめざすところと、学習指導要領に言う目標とには相当な懸隔、敢えて言えばむしろ対立する要素があり、看過することができないほどの齟齬を生んでいる」ことを確認しなければならないと、「学習指

導要領の示す『社会科の目標及び内容』（第2章）をたどりながら、問題点を別出しておこう」と強く主張する。

氏は「社会科全体の目標」をあげ、各学年の目標がさらに細かく「理解に関する目標」、「態度に関する目標」、「能力に関する目標」の三つに分かれることを示し、次いで第6学年の歴史に関するところをあげる。

即ち、「理解に関する目標」として「国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにする」、「態度に関する目標」として「我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようにする」、「能力に関する目標」として「社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の意味をより広い視野から考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする」とある。

上記の説明を踏まえて、氏は「ここに示される理解・態度・能力に関する目標は、こうして並べてみると、必ずしもこの三つの間に整合性や連関性がとれるとは限らないことが見えてくる」と述べる。そして、例として「『国家・社会の発展に大きな働きをした先人』という人々は各時代のパイオニアとして、『態度』にある『我が国の歴史や伝統を大切に』することなくむしろ変革を促した人ではなかったであろうか。また、『能力』において養成される分析力や表現力は、『態度』にある『国を愛する心情』という情緒的なものとは相いれない場合もある。さらに個別的に考えるならば、『理解』における取り上げられる対象が（ここには明言されないが）ある特定の立場から評価される人物を中心とした課題の選択にとどまることは、問題視されて当然であろう」と述べる。

さらに、氏は「何より、『態度』における『我

が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようにする』という極めてエモーショナルな方向性は、児童生徒に対する押しつけがましい指導として本質的に問題があるとせねばならないし、歴史学の目的ともそもそも全く相容れないといわなければならない。『我が国の歴史』なるものはいかなる展開を経てきたものであるのかを適切に受け止めることが重要なのであり、そこに現代にも通用する要素があるならば『大切に』できるのであって、初めから『大切に』することを目標として定めるのは順序が逆転している。『伝統』についても同様で、それが単に町の祭りレベルであればともかく、道徳も含めた社会の成り立ち方にも範囲が広がるなら、克服すべき要素も多くなるはずである。むしろこうした自分の帰属するものへの『愛情』から離れて、自らを客観視・相対化するために歴史を学ぶ本来の意味から遠く離れた不見識なものとしか言いようがない」と論断するのである（82頁）。筆者もただただ首肯するばかりである。

この後、氏は「小学校社会・歴史における若干の問題」として、「①元との戦い」、「②いわゆる『鎖国』。江戸時代のオランダとの関係」、「③日清戦争と日露戦争」を事例にする。そして「結語」として「小学校・社会科における歴史の扱い方について若干の見解を述べ」るのであるが、ここでは割愛する（「おわりに」参照）。

おわりに

本稿は、筆者が学習指導案作成のために波巖氏の著作に出会い、学ぶべきことは多々あるものの、学習指導要領をそのまま受容する姿勢に疑問を感じたことから始まった。そこから出発することにより、かつて学んだ臼井嘉一氏の書籍を読み直し、竹内康浩氏に重要な論考があることに気が付かな

かったわが身の不明を恥じることとなった。

以下、筆者が現在において問題としたいと考えている点に言及していくが、上述の個所において提示した問題にすべて触れてはいることをお断りしておきたい。

さて、白井氏が提唱されたことのひとつに「東アジアにおける日本」の問題があるが、それについては竹内氏が当面の回答を示している。また白井氏が「小学校の歴史学習の特性を表す意図から典型的な『人物』42名指定」していることについて「必ずしも適切な方法とはいえません」と疑義を呈していることは、明らかにしておきたい。波巖氏は無批判に受け入れているのである。

波氏の実践に「源頼朝の決断」があるが、これは白井氏の言う「構成活動」と「劇的活動」と重なるものであろうか。戦後初期の学習指導法の再評価から考察の必要があろう。先に紹介したように学生のレポートから問題の大きさが垣間見えることを報告しておきたい。

高校世界史及び高校日本史については、それなりの研究蓄積があると思われるが、小学校社会科歴史については、その出発点から構築していかなくてはならないであろう。例えば、小学校社会科を履修する学生に「歴史とは何か」という問題にどのように対峙させるのか、また筆者たちの役割として学習指導要領への批判もきちんと打ち出しに行くべきであろう。

竹内氏の論考からは、小学校社会科歴史における問題点が明らかになった。ここで、氏の「小学校・社会科における歴史の扱い方について」の見解を紹介しておきたい。氏は、「①重要事項になじませる」、「②誤解を避けるように留意する」、「③結果(影響)の大きさを重視する」と三点を提唱し、それぞれに事例をあげた確かなコメントを付している。—そのコメントについて検討することから始めることが重要である(「結語」)。

最後に、氏は「教員養成の中で正しい(学問的な)歴史像を学んでいないと難しい」と述べ、「学会水準の歴史知識や探求態度が求められるのであり、問題は、私もその一人である、大学の歴史担当教員の任務・責任に帰ってくるのである」と自らの立ち位置を明らかにするが、その点からも竹内氏の論考は格好の水先案内となる。—これからだ、というのが筆者の現在の感慨である。

註

- i 拙稿「小学校歴史教材『エルトゥール号事件』をめぐって」(『総合歴史教育』第51号、総合歴史教育研究会、2017)。齋藤氏の論文とは「小学生に授業を一優れた社会科歴史の授業とはなにか—」(『比較文化研究』No.123、日本比較文化学会、2016年)、「エルトゥール号事件を題材とした小学歴史の授業」(『日本比較文化研究』No.125、2017年)をさす。
- ii 水原克敏『学習指導要領は国民形成の設計書—その能力観と人間像の歴史的変遷—』(東北大学出版会、2010年)参照。
- iii 筆者には「元寇!キミならどうする?—歴史教科書における『元寇』叙述をめぐって—」(日本比較文化学会関東支部編『比較文化学の地平を拓く』所収、開文社出版、2014年)がある。

The Teaching of History in Social Studies Classes in Elementary Schools

Shuichi NOGUCHI

【abstract】

The present author has felt for a long time that there are problems with the way history is taught in elementary schools. This paper begins by looking carefully at some articles by Kaichi Usui, Iwao Nami and Yasuhiro Takeuchi. Among them, Takeuchi in particular significantly points out that there is a big discrepancy between the purpose of the professional study of history and the aim of elementary school history teaching in the “Course of Study” designated by the Ministry of Education. First, the paper criticizes the “Course of Study” in terms of how the teaching of history in elementary schools should be and then proposes a question about how elementary school teachers and students should face up to the concept of “What is history?”

【key words】

social studies classes in elementary schools, the teaching of history, the “Course of Study” designated by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology

